
パブロ・ピカソの《ゲルニカ》とアルフレッド・バー
——ニューヨーク近代美術館のシンポジウム(1947)再考

久保田有寿(早稲田大学)

パブロ・ピカソ(1881-1973)による《ゲルニカ》は、1937年、内戦下のスペインで起きたゲルニカ爆撃事件をきっかけに描かれ、パリ万国博覧会のスペイン共和国館で公開される。その後、同作はスペイン難民救済キャンペーンで1939年にアメリカに渡るが、第二次世界大戦の勃発により、ニューヨーク近代美術館(以下MoMA)に寄託される。《ゲルニカ》の批評と解釈は、初代館長アルフレッド・H・バー・Jr.(1902-1981)によって決定的展開を迎え、その誕生から10年後、《ゲルニカ》を巡る大規模なシンポジウムが開催された。本発表は、MoMAアーカイヴ調査で入手した一次資料をもとに、従来その重要性が認められながらも詳細に検討されてこなかったこの《ゲルニカ》シンポジウム(以下ゲルニカ・シンポ)の実態を改めて明らかにし、《ゲルニカ》の受容及び研究史における同シンポジウムの位置づけと、バーの果たした意義を再考する。

1947年11月25日に行われたゲルニカ・シンポでは、バーの司会進行のもと、パリ万博スペイン館関係者やスチュアート・デイヴィス、ベン・シャーンといったアメリカの芸術家など計7名が参加し、《ゲルニカ》の社会的機能や意味解釈について議論された。

先行研究において、同シンポジウムは、《ゲルニカ》が美術史的な解釈の対象へと移行する一つの分水嶺と指摘されるも十分に論じられておらず、シンポを記録したタイプ原稿の一部が抜粋、再録されるに留まってきた。この原稿は未刊行のままアーカイヴに保管されており、ゲルニカ・シンポの全貌ははまだ公的に明らかにされてはいない。その一方で、シンポ登壇者のジェローム・セックラーとフアン・ラレーアによる、《ゲルニカ》の牡牛と馬のモチーフの解釈論争ばかりが注目を集めてきた。

こうした状況に対して、本発表では、シンポ開催の当時者であるバーに着目し、基礎資料となる記録原稿に加えて彼の著述や書簡を読み解くことで、同シンポジウムの全体像のみならず、その開催の美学的、政治的背景や実現に至るプロセス、バーの意図や戦略、問題意識をも浮き彫りにすることを目指す。

バーの初期の使命は、執筆活動を通して《ゲルニカ》の評価を定め、その普遍的価値を意欲的に発信することであった。戦後、1947年出版のラレーアによる《ゲルニカ》研究書が転機となり、バーの問題意識は《ゲルニカ》の図像解釈へと移行する。牡牛と馬の象徴性について独自の解釈を展開するラレーアに対し、バーはピカソ本人から真実を聞き出そうと試みるが、ピカソは、鑑賞者にゆだねる、という意味を伝えるのみだった。こうして画家が口を閉ざしたことで、《ゲルニカ》の解釈は第三者にゆだねられ、彼らが公の場で議論を交わすためのシンポジウム開催に発展していく。同シンポジウムは、戦後アメリカにおける《ゲルニカ》の話題性と評価の高まりを助長すると同時に、その後の《ゲルニカ》研究史において画期的な転換点となったのである。